

# 大分県現代俳句協会句会報

## 第20号

令和4年11月22日発行

### 〔令和4年 自薦作品選句号〕

# 第25回 大分県現代俳句協会賞 作品募集

〓 応募締切12月31日（必着） 〓

大分県現代俳句協会賞は、県協会の目指す俳句の方向性と到達点を協会内外に示すとともに、県協会の質的向上（応募者・選者とも）をはかる目的で制定されています。過去にのべ25名の受賞者を輩出しました。前回（第24回）は国東市の福田英子氏が受賞しました。

前回の24回では会員歴3年未満の方から数十年の方まで、計23名が応募しました。ベテランの方も新人の方も、俳句上達の最も確かな方法の一つに協会賞があるということをしつかりと位置づけてほしいと願っています。

以下の要領で第25回大分県現代俳句協会賞を募集します。ふるってご応募ください。

## 〈応募要項〉

この賞の意義は、単に応募者の実力試しということだけにとどまらず、協会内で俳句研鑽の気運を高めること、選者間の議論によって選者自身のスキルを向上させること、これらを通じて協会の質的、量的実力を高めていくことにあります。

私にはまだ早い、もう少し実力がついてからと躊躇する必要はありません。多くの一流の先生方に自作の20句を丁寧に見てもらえるチャンスはそんなにあることはありません。応募すること自体が俳句の勉強です。授賞することだけが協会賞の意義ではありません。

応募資格… 県協会員であること（すでに同賞を受賞している者は除く）

作 品… 20句一組（一人一編限り）

タイトルを付加すること。令和3年10月以降（前回協会賞締切以降）の作品。

既発表、未発表は問わない）

応募用紙… 横方向縦書きのA4原稿 用紙使用

のこと（ワープロもこれに準ずる）。誰でも読める字で書き、右の欄外に

タイトル、左の欄外に氏名とあれば俳号を明記する。

締 切… 12月31日（必着）

応募料… 2千円・必ず作品に同封すること  
送り先… 事務局（足立）まで

選考委員… 河野輝暉、谷川彰啓、有村王志（選考委員長）、上田たかし、河野則子、伊藤利恵、中山宙虫（7人）

注意事項…

・ 作品は一句一句の出来映えの他に、20句一組の句集（タイトルも含む）としての完成度も、評価の対象になります。

・ 応募後の訂正には応じられません。原稿の返却には応じられないので、必要なら各自コピーを取ってください。

・ 選考は、応募者全員の条件を揃えるために作者名を伏せ、活字化して各選者に渡します。活字化の際は十分注意しますが、難読が原因による誤字は、応募者の責任とします。

・ すでに評価の定まった作品（大きな大会の上位入賞句等）の応募は違反ではありませんが、選者を試すようなマナー違反と捉えられることがあります。著しい場合は減点の対象になります。

・ 応募者全員に、全応募作品が載った作品集と、詳しい選考結果を差し上げます。誌上に載せる場合は下位の作品は伏せます。

# 令和四年「自薦作品」選句用作品集

令和四年度自薦作品には、五十五名、全三二〇句の投句がありました。この句の中から、巻末の選句要領にしたがい選句と選評（選評は任意）をお願いします。

宮川三保子

- 1 ひまわりを咲かせて戦争を見ておりぬ
- 2 ゲルニカはピカソの叫び日輪草
- 3 物忘れ進む恐怖やそぞろ寒
- 4 人の世は夢幻の如し雪の華

菅 攝子

- 5 雛の眼に映る憂き世の美しき
- 6 ほろほろと故郷をこぼす蓼の花
- 7 デパ地下に初夏の愁いを持ち歩く
- 8 小蟹群れ淋しき夕日来て甘ゆ

衛藤 俊一

- 9 コスモスと隠れんぼする駅舎塀
- 10 あてもなく記憶頼りに紅葉の湯
- 11 どんぐりの林の中に鬼がいる
- 12 雨樋にひっそり昏れる柿紅葉

菅 登貴子

- 13 透明な世界は自由金魚たち
- 14 パステル画描きて野ばらは音楽に
- 15 ロシアにも休刊日あり夏の月
- 16 母の日へ福を授けし服選び

甲斐 素純

- 17 過疎の村案山子が人を目立たす
- 18 稗取らむ老いと仲良く田を継いで
- 19 戦国の怨念未だ曼珠沙華
- 20 振り売りの古都の夏来る鴨の川

足立 攝

- 21 名月に母を還してよりの黙
- 22 稲刈を終えた空から透きとおる
- 23 自撮り棒ぬつと突き出る鯨日和
- 24 影のあるものが吼える後の月

大神 愛子

- 25 初盆に消しゆく人の住所録
- 26 梅雨空に姪は旅立つ黄泉の国
- 27 生るる事茨の道のくりかえし
- 28 彼岸入りいなりの味が母に似て

岸本千鶴子

- 29 ビタミンの赤白黄色チューリップ
- 30 のりしろでつぎ足す命髪洗う
- 31 海原を結んでひらく秋の蝶
- 32 ひとり言家電に云わせ日向ぼこ

有村 王志

- 33 かなしいほど鶴見る老々介護かな
- 34 緑陰やいまも主役はゼレンスキー
- 35 片陰出て二足歩行にまた戻る
- 36 脱皮の蛇途中をだれも見っていない

足立 町子

- 37 たましいが口から漏れて冬銀河
- 38 開墾の父を眠らす冬の雨
- 39 冬青空人の祈りが満ちている
- 40 眠る師のあたたかくあり石露の花

灘波 瑞枝

- 41 二人して六十四年春田打つ
- 42 死に仕度一つを片付け古日記
- 43 墓じまいしている古里秋彼岸
- 44 草の花草には草の生命あり

福田 英子

- 45 早蕨や一代きりの開拓史
- 46 黄泉路にもきつと俳句を葉月尽
- 47 密柑山に座りて海に漕手逝くや
- 48 戻り来い蜜柑受粉の頃はむ

下司 正昭

- 49 死ぬために生きた二十歳の秋螢
- 50 シベリアの凍土の墓碑は祖国向き
- 51 無言館のドラマに涙虫の秋
- 52 裸婦像は恥じらいみせて秋桜

安森 範明

- 53 娘より買ひ物誘ふ秋の雨
- 54 朝顔の日ごと小さく母偲ぶ
- 55 風鈴や俳句色紙に刻かけて
- 56 乳飲み子のはなちようちん秋の空

加藤 征孝

- 57 落雷の朝に犇めく雲は黒
- 58 コンバインさわやかに吹くりズム
- 59 稲刈のバック音に流れる汗
- 60 彼岸花想い出の地は帰らない

岡野 紘宣

- 61 山ぶどう酸っぱき故郷はダムの中
- 62 CDの穴の細さや夜半の冬
- 63 人間も所領の内か冬とんび
- 64 言ひ負けていつまで続く松手入

本田 圭子

65 うららかや手帳に挟む水の音  
66 プリントが破れる程に消して夏  
67 二冊目の句帳はホテルで締めくくる  
68 夏の月手紙一通書き終えて

神 慶子

69 バス停の女が褪せてゆく残暑  
70 羽黒とんぼの逡巡しては日が暮れる  
71 新涼の女きれいになってゆく  
72 ゆきずりの人と良夜を称えあう

小川 良子

73 鬼灯を鳴らした昭和懐しむ  
74 コスモスの香り漂う亡父の家  
75 母の背が苦勞を語る曼珠沙華  
76 秋刀魚焼く煙の中の一人かな

早澤まり子

77 枯木立寄贈者の木札ついたまま  
78 新蕎麦を九十五歳の腕力  
79 表札は亡き夫のまま注連飾り  
80 今少し生きられるかと星数え

河野 輝暉

81 精米のコイン落つ音鳥雲に  
82 蕎麦の湯気にちちは降臨す  
83 子に逝かれ萩にも散られ忘れ鎌  
84 柿食えば空也の瘦もわれのうち

河野 則子

85 捺印を逆さに押して晩夏光  
86 ごみ出しやマスクで隠す朝の顔  
87 野の花を摘むことをやめ合掌す  
88 俎に葱の香残し出勤す

安部ユリ子

89 夏木立メジャーの目盛メタボ「H(ハイ)」  
90 連発に息のむ火花ガラスごし  
91 ドローンを子に操らせ稲の波  
92 明月をお盆に載せてミニ宴

菅 勲

93 虹立ちて一人寝の村ゆりおこす  
94 一つづつ心の闇を捨て遍路  
95 寒村の今年かぎりか青田風  
96 透きとおる童の歌や天高し

岡村 君香

97 柔軟剤変えて心も秋に入る  
98 名月に主役を譲る天守閣  
99 稲刈りを見ているだけの母の背よ  
100 青天やいつもの場所に金木屋

安田 文

101 盆太鼓三年ぶりの踊りの輪  
102 彩りが重なりあつて秋の山  
103 池に鯉水面に映るうろこ雲  
104 腰おもき夫をさそつて望の月

瀬川 剛一

105 他愛なく老いて候ふ春灯  
106 核の灰どこへ夏のブーメラン  
107 坊がつる湿原しんしんアルマイル  
108 天皇のエンゲル係教室の花

井上 則子

109 声かけてひと枝空家の檀の実  
110 漸うに彩増す山に鳶の舞う  
111 水澄みて群遡る小魚の  
112 菊の香に背筋伸ばして一歩前

甲斐加代子

113 栗めしを握る十指や八十路越え  
114 行く秋のつぶやき投げるせせらぎに  
115 自然薯の切れないねばり父の鍬  
116 秋天にあしたを預け深呼吸

坂本 一光

117 名月の下にもいくさする人ら  
118 愚かなる考える葦秋に入る  
119 野葡萄の終の覚悟を垣間見る  
120 死ぬことは生きることだと草紅葉

赤峰佐代子

121 人間に戻ろう九重の秋一歩  
122 美しい命生き抜け冬苺  
123 無駄口の減らない女や秋暑し  
124 赤子泣く村に久久菊日和

林 香澄

125 放り込まれ紅葉舞う音MRI  
126 ピーマン尽くし無口な夫の鼻青み  
127 白月や剥き身の貝の海渡る  
128 若尾花振り返りなどしておらぬ

西峯 峰子

129 夏つばめ空を大きく使ふなり  
130 秋の蝶母は昼夜の時失くす  
131 夕暮れは蓑虫の蓑ほころびぬ  
132 罌雲十七文字の暮らしあり

佐藤 珠幸

133 どちらかが突き放したか流れ星  
134 秋刀魚焼く色をなくした空の端  
135 遠回りすればそこにも秋の風  
136 龍淵に私の弱さ潜みおり

- 137 新米や飯大盛りの安全靴 園田 武子  
138 星飛んで「いいね」が地球這い回る  
139 破れ芭蕉ドミノ倒しの温暖化  
140 それ以上問いつめないで桑いちご 御手洗豊海
- 141 これからは余生と決めて春炬燵  
142 恋愛も別れもありて遠花火  
143 神楽面はずし素顔の人となり  
144 今日生きてあしたはありや冬の蝶 鎌倉真由美
- 145 向日葵のむこうに戦争未亡人  
146 行く秋を軽トラで追う男達  
147 朝な夕な見ているだけの柿落ちる  
148 急ぐ秋告白はまだまだなのよ 上田たかし
- 149 秋灯下きれいな嘘を重ねゆく  
150 どんぐりの残像追っている鼓動  
151 過去の翳落とす棚田の稲を刈る  
152 平和論説いてさんまの客でいる 白土 正江
- 153 生きているハイビスカスの長き舌  
154 私の目は節穴でした敗戦忌  
155 七回忌父の竿出す鯊の秋  
156 十二月八日両手につつま膝がしら 佐々木 玉
- 157 受け流すことも大切猫じゃらし  
158 首筋を撫でる秋風閻魔堂  
159 はかりごと考えている小判草  
160 振花や素直になれぬこと多し
- 161 生涯は長し短し菊香る 甲斐 順子  
162 ところと燃える火の色柿の色  
163 ぐつすりの夢に夢中の夜長かな  
164 シンプルの豊かな心むかご飯 吉田 素子
- 165 昔とはどこかが違ふ秋刀魚食む  
166 団栗を踏まねば行けぬ道具小屋  
167 念力のかかった樹より紅葉す  
168 老いも死も美しきかな真夜の露 田中 充
- 169 表嵐焦土にいのち軋み合う  
170 うたかたの言葉を掬う花野道  
171 地球儀の汚点を拭う白木蓮  
172 くぐり戸の灯のやわらかし十三夜 稲田久美子
- 173 去年より少し小振りの秋刀魚買う  
174 秋灯が青ざめた吾を写し出す  
175 コスモスをリュックに刺して山ガール  
176 名月を背にして団子食べる夫 小野みち子
- 177 来るべき刻を知らせる秋あかね  
178 老人を詩人に変える秋の空  
179 旧友が来てそれぞれの秋日和  
180 こんな夜は母の遺せし糸瓜水 児玉 利子
- 181 秋灯に日々の重さを思いしる  
182 稲刈に鎌がいらぬ世になりて  
183 どんぐりの帰るところは紙芝居  
184 落ちてきた紅葉何だか棄てがたい
- 185 秋灯の音なき世界へ迷い込む 赤嶺 信子  
186 紅葉の大パノラマに声枯らす  
187 稲刈りや家族総出の日の遠く  
188 千枚田稲刈り終えてより主の顔 飯田 幸子
- 189 翳雲まだ晩成に届かざる  
190 うつむいた日々楓の色づけり  
191 他人井食べるふたりや今日から秋  
192 胸中の炎が褪せてゆく晩秋 佐藤 哲夫
- 193 行く秋や臆鞘炎に陽が落ちる  
194 団栗を入れるポケット穴がある  
195 赤い羽根つけて福祉の灯をともし  
196 三年目のコロナに耐える案山子たち 時松由美子
- 197 蝉の声いれてオムレツふんわりと  
198 白檀の形見の扇子ははの風  
199 白玉やつるりつるりと健忘症  
200 亡夫のくせ思い出させし木の葉髪 平田千代子
- 201 眼裏に少しだけある秋の鬱  
202 夕月へ子どもがキックするボール  
203 新米をまずは我が家の暴君へ  
204 この花野毛羽立つように揺れており 陣野千恵子
- 205 百日草君の隣にずっといる  
206 無花果や与えるだけが愛じゃない  
207 ベランダに夏の思い出干しておく  
208 つぎの世へ羽根を広げる鳶紅葉

福田スミ子

209 川底に落ちて浮かばぬ落葉あり  
210 黙した日これでいいかと地虫鳴く  
211 秋の蝶毒持つ草の蜜も吸ふ  
212 柿ばくだん野仏の顔さけて落つ

足立 鶴男

13 一句詠み一句棄てたる秋彼岸  
14 この街の見える範囲はみな残暑  
15 腰痛も少しやわらぎ九月来る  
16 秋風は大事な人もすり抜ける

幸谷 恵子

17 冬の蜂背骨の曲がりたる父と  
18 冬堇前へ前へと夫の足  
19 小春日を連れて阿修羅で再会す  
20 正倉院見て春愁を閉じこめる

### 以上200句の選句・選評を

お願いいたします。締切12月21日(水)

### ◆10句選+選評を別紙の投句用紙で

今回の自薦作品の選句選評は、これまで二回の雑詠句会の時と比べて、作者名が分かった上での選考になります。慣れた人には何でもないことですが、新しい会員にとってはやりにくい作業になると思います。

作者名が最初に分かっているのですから、どうしてもお世話になった人や、尊敬している人の作品に甘い点数をつけてしまいがちです。ま

た作者の置かれた状況や身の上を知っていれば、作品には書かれていないその人の知識を加味して作品の良し悪しを判断してしまいます

人間ですからある程度の情が紛れこむことは防げませんが、それを極力排除することが「作者名の入った作品」を評価する訓練になります。

この訓練ができていないと、将来的に大会等の選者になっても、自分の県、自分の句会、自分の身内に甘いと、陰口されるようになります。ある程度ベテランになれば、注意してくれる人はいなくなります。今のうちに訓練しましょう。

#### 《平成四年自選句について》

● 第一回雑詠句会、第二回雑詠句会の選句結果はすでに発表されています。それに今回の自選作品(会員の選句前)を加えて、計十句が特別選者による年鑑一句賞の対象になります。

● 郵便事情が非常に悪化しています。県内で月火に投函すれば、まず間違いなくその週につきませんが、水曜日投函なら微妙です。木曜日の投函分は翌週になります。事務連絡等は、郵便事情を考慮して早めにお願ひします。

● 締切は12月21日(水)消印有効です。同封の投句用紙のほか、メールや郵送も受けつけます。

● 10句選のほか、なるべくその中の一句を対象に選評を書いてください。選評を書けば俳句への理解が深まります。これも俳句の勉強です。

|| 訃報 ||

● 宮崎 山景さん

・ 令和4年10月7日ご逝去。享年75歳

・ 日田俳句会の前会長であり、この地区の俳句運動に指導的役割を果たす。

● 成清 正之顧問

・ 令和4年11月13日ご逝去。享年95歳。

・ 県協会創立時のメンバー。元会長。県協会賞をはじめ数々の選者を歴任。後進の指導に尽力。

## 大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村王志



《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL: <http://www.gendaihaiku.net>

E-Mail: [info@gendaihaiku.net](mailto:info@gendaihaiku.net)